序

1．研究の背景

「火の見櫓」の機能は一般的に『火事を発見したり、火事の方向・距離などを見張り、報知するための櫓』と定義されるが、

①視覚的焦点（ランドマーク）

②情報発信

③消防組織の象徴　　など

の役割も果たしてきた。しかしながら、

①街並みの高層化

②火災報知機・防災無線などの代替手段の発達

③自衛消防組織（消防団など）の崩壊　　など

により、現在、「火の見櫓」は都心部から姿を消し（平成３年度東京23区へのヒアリング調査によれば消防署に併設された望楼を除いて自衛消防の「火の見櫓」は現存せず、また後述するように都内の消防署に併設された望楼も現在は休止状態である）、都市周辺部や農山漁村に残るのみとなっている。

「火の見櫓」は歴史学の研究成果によって近世江戸において発生したことが明かにされており、その当時の様子を伝える資料や絵図など史料も数多く残されている。一般に「火の見櫓」に関する研究は江戸期の消防を対象としたものが多く、それらは主に時代考証的な立場から「火の見櫓」を扱っている。また、消防史・防災史の立場からの「火の見櫓」の研究も見られるが、旧態依然の火災報知施設という扱いで触れられているに過ぎない。したがって近世江戸の「火の見櫓」が現代の地方農山漁村の津々浦々の集落までいかに伝播したのか？

何故、江戸幕府のお触れでつくられた都市施設が一般庶民のコミュニティのシンボルとなったのか？　といった疑問に対する体系的な研究はこれまでのところ見受けられない（国会図書館および防災専門図書館における筆者調べ）。

一方、現在でも農山漁村には「火の見櫓」が現存しており、自然系の要素が多くを占める集落景観において「火の見櫓」は特徴的な景観要素に位置づけられる。また、単に景観的側面だけではなく「集落の天守閣」の如くコミュニティのシンボルとしてそびえ建っている。今日、「火の見櫓」はわれわれ日本人の原風景を構成する重要な要素にも位置づけられるのではないだろうか。しかしながら、わが国の集落景観の主役であり、その変遷を見つめてきた「火の見櫓」は、火災報知システムの発達により、消防ホースの乾燥台あるいは防災スピーカーの支柱としての機能を果たすのみで無用の長物となりつつある。

塗装費用など経費がかかるといった理由から自治組織では維持することができずに撤去される事例や、老朽化のため大地震による倒壊を危惧して撤去される事例が増えつつある。今日、「火の見櫓」を取りまく社会的背景は大きく変化しつつある。

2．研究の目的

こうした現況において、減少しつつあるわが国の「火の見櫓」を記録にとどめることは意義深いと考えられる。（資料参照）

また、前述のように「火の見櫓」は景観の両義性（風景＋景域）を統合する要素にも位置づけられる。すなわち、

①集落風景の主たる視覚的要素としての「火の見櫓」

②集落の精神的まとまりの象徴としての「火の見櫓」

のふたつの側面であり、景観形成事業の対象としても、また景観・景域研究の対象としても重要であると考えられる。

こうした問題意識をもとに本研究では都市デザインの立場から

1-1伝播のプロセス

江戸から現代へ（時間）

江戸から地方へ（空間）

官から民へ　　（組織）

1-2形態特性

形態の類型化（櫓型と梯子型）

櫓（矢倉）の記号性（屋根の形状）

構造（Ｗ／Ｓ／ＲＣ･･･）

1-3機能特性

火災予防

コミュニティシンボル（集落の天守閣）

ホース干し

付属設備

1-4立地特性

土地条件　（水利・見晴らし･･･）

交通条件　（辻・橋詰･･･）

土地利用　（宗教施設・文教施設・広場･･･）

併設施設　（ポンプ小屋・詰所・集会施設･･･）

１櫓／１コミュニティ（「火の見櫓」１基あたりの人口、世帯数）

などの分析視点を設け、

a)江戸の「火の見櫓」をはじめとする、「火の見櫓」のルーツとそれらがいかに、全国津々浦々へ伝播していったかといった、「火の見櫓」の発生および、その原型と発展過程についての仮説を提示する。

b)現存する「火の見櫓」の現況を調査する。

ことから「火の見櫓」の都市デザイン的意義について論じることを目的とした一連の研究の端緒に位置づけられる。

本報告書ではまず、第1部において既往研究の整理から明らかにされた「火の見櫓」のルーツとその後の展開について報告する。つぎに、第2部において山梨県早川町に現存する「火の見櫓」の実態調査および調査事例の類型化の試みについて報告する。

なお、一般に「火の見櫓」と呼ばれるものは、現在、消防の分野では「望楼」と呼ばれている。また、江戸時代においても様々な呼称がみられるが、本研究では基本的に「火の見櫓」という呼称で統一することとする。